

論文の内容の要旨

論文題目 近代皇族表象の研究 ―昭和戦前・戦中・戦後期における直宮イメージを中心に

—

氏名 茂木謙之介

本稿の目的は、戦前・戦中・戦後日本における皇族、なかでも直宮と呼ばれた昭和天皇の弟宮たちの表象の検討を通して、当該期における天皇(制)表象の歴史記述を構築するところにある。

第 I 部では、1926 年前後から 1945 年までの昭和戦前戦中期における皇族をめぐる表象を考察することで、同時代の天皇神格化言説の構造を明らかにするとともに、特に地域社会における皇族表象の持った意味を解明した。

I - i では、宮内庁の宮内公文書館および国立公文書館所蔵の公文書を検討し、皇族表象生成をめぐる制度的規範と宮内省および文部省、内務省における皇族の位置づけを確認した。ここでは国家機関の認識において、特権的な天皇とは差異化された存在として皇族をみなす傾向があったことを確認することができた。

かかる傾向は戦前戦中期の中央諸メディアにおける皇族表象にも影響を及ぼしている。

I - ii においては主に中央諸メディアにおける皇族表象について検討を加えた。I - ii - i では、当該期の『朝日新聞』『東京朝日新聞』における直宮関連記事を、先行論で提示された天皇表象との比較を通しつつ検討した。戦前戦中期の中央紙における皇族表象に関しては、ある程度の類型化が可能である。既に指摘のある政治的主体や軍人としての在り様の外に、学芸振興や社会事業、福祉事業、産業振興に関わるもの、宮中内存在としての〈家

族) 像の提示や儀礼に参加する在り様、国家イベントとの関わりなどを明らかにした。I - ii - ii ではグラフ雑誌『アサヒグラフ』を検討した。ここでも I - ii - i と近似した諸様相が確認でき、それらの類型化を行うとともに、経年変化を分析した。同誌では同時代の「文化の担い手」としての皇族像を提示するものも多く確認することもでき、そこからはグラフ雑誌というメディアの性格に適合するような主体として、また国民生活の多様化に対応した存在として皇族は在ったことが指摘できる。I - ii - iii では、戦前戦中期において史上最大の発行部数を記録した雑誌『家の光』における皇族表象の検討を行った。報道記事では、新聞メディアと重なる諸様相が確認できたが、特集記事からは、農村向けの総合雑誌という同誌の性格と隣接させた形での皇族表象の展開を確認できた。

これらのいわば広汎に流布した皇族イメージは、地域社会においてはいかなるものとして展開していたのか。第 I 部の後半はこの点に焦点を絞って検討を行った。

I - iii では、皇族の地方訪問「御成」のうち、当該期の宮城県の事例を挙げ、地域行政が如何に中央官庁と関わりつつ、皇族の訪問を受け入れたかを天皇・皇后・皇太子の地方訪問である行幸啓と比較しつつ検討した。「御成」は地域社会と皇族の接点となるイベントであり、皇族に関する言説が生成される磁場となっていた。その中では地方行政機関の極めて主体的な動きと、「御成」を受け入れる論理を確認することができた。

かかる制度的な側面を踏まえ、I - iv では戦前戦中期の地域社会で展開した皇族表象、なかでも昭和天皇の弟宮であり、同時代に国民的人気を博した秩父宮雍仁の表象を中心に検討した。I - iv - i では、I - iii で既に扱った宮城県における皇族「御成」について、地方紙『河北新報』における報道を中心に、地域メディアにおける皇族表象を検討した。中央メディアにおける皇族表象との共通点と差異を明らかにするとともに、特に当該期に神格化が進展した天皇との対比を試みた。つづく I - iv - ii では、秩父宮号の元となり、秩父宮が複数回訪問した地域である埼玉県秩父地方で展開された皇族表象の検討を行った。「僻地」の自己認識をもつ地域社会にとって、皇室との直接の関係形成は、その抑圧的な状況を脱する契機として扱われていた。I - iv - iii では 1928 年の秩父宮と松平節子（勢津子）の成婚をめぐる、主に福島県会津地方における報道を分析した。戊辰戦争という近代化の（負）の記憶を負った土地において、皇族との関係性の形成は地域の名誉回復と密接に結びつけられ語られていた。そして I - iv - iv では、1935 年から 1 年 4 ヶ月にわたる秩父宮の軍務による弘前在勤をめぐり、青森県域で流通した様々のメディアに登場した秩父宮表象を検討した。地域との実体的な関わりを経て、皇族表象に変化が生まれることを明らかにした。I 補章においては、この青森における秩父宮表象の中でも、特に中等諸学校の『校友会雑誌』において展開したそれを取り上げ、1920 年代末の昭和天皇の即位大礼に関する『校友会雑誌』における天皇表象との比較を行った。

以上、第 I 部では、全国的な表象や（国家意思）とは離れたところに存する地域社会の〈現人神〉的存在・崇敬対象としての皇族表象が、先行研究も触れてこなかった当該時期の天皇崇敬における看過しがたい多様性をもつことを明らかにした。皇族という存在を介した皇

室と国民との関係性形成の言説は、国家機関の狙いと齟齬をきたしつつも、地域社会レベルでの天皇(制)国民国家の再生産・維持に資していた。そして、第Ⅰ部では皇族に対する期待の地平が如何に存在していたかも明らかとなった。メディアや諸官庁などによる期待・欲望を受け止める主体として皇族は在り、特に近代以降、僻地としての自己認識や〈負〉の記憶をもつ地域において皇族は近代国家との関わりを求める際の象徴的な存在として希求されていた。

つづく第Ⅱ部では、戦後(占領中・占領後)期における皇族をめぐる表象について、戦前戦中期との連続性と分断とを中心に考察した。

Ⅱ－ⅰでは、1945年から1953年までの占領期・占領後の中央メディアにおける皇族表象について検討した。Ⅱ－ⅰ－ⅰでは、当該期『朝日新聞』における皇族表象を検討した。ここでの皇族表象には、学芸や産業の振興者等、戦前の諸様相を引継いでいることが指摘できると共に、戦前の、主に地域社会における諸言説で確認されていたような、人びととの親密さがより前景化する状況を見出せた。Ⅱ－ⅰ－ⅱでは、戦後『アサヒグラフ』における皇族表象の検討によって戦前の「平民的」イメージと接続された「民主的」イメージが明らかとなった。Ⅱ－ⅰ－ⅲでは、当該期の秩父宮による自筆記事を検討した。秩父宮の自筆テキストは所謂オールド・リベラリストたちの言説と間テキスト性があり、天皇(制)の擁護に資するものとしてあった。Ⅱ－ⅰ－ⅳでは、秩父宮を直接見知っていた内田百閒による小説テキスト「秩父宮殿下に上の書」(1950年)を検討した。秩父宮の自筆テキストにおいて不可視化されていた戦前戦中期の諸様相、なかでも皇族の戦争責任を百閒のテキストは決して明示的ではないにせよ暴き立てる可能性を持っていた。

Ⅱ－ⅱでは、再び地域社会に目を転じて、戦後期の皇族の地方訪問と地域行政について分析を行った。同章では戦後における宮城県への「御成」を事例に、Ⅰ－ⅲで行ったのと同様に県行政関連の公文書を検討し、地域行政が如何に皇族の訪問を受け入れたかを分析することで、戦後地域社会における皇族表象生成の前提を明らかにした。

Ⅱ－ⅲでは戦後地域社会における皇族表象として、第Ⅰ部で分析を行った諸地域における皇族表象を検討した。Ⅱ－ⅲ－ⅰでは、前章でも検討を行った宮城県における皇族「御成」について、『河北新報』の報道を中心に、地域メディアにおける皇族表象を検討し、戦後地域社会における皇族表象が戦前戦中期からの連続性の中にあることを明らかにした。つづくⅡ－ⅲ－ⅱでは、戦後秩父地方における皇族顕彰運動について分析を行った。同地では秩父宮の死の直後、秩父宮顕彰の社団法人が設立された。同法人の所蔵文書および地元紙の分析からは、天皇と通底するような神格視と地域振興が共存するという、戦前戦中期における皇族崇敬の再生産が確認できた。Ⅱ－ⅲ－ⅲでは、戦後の福島県域における、秩父宮妃勢津子の訪問と、秩父宮の死の報道に関する報道について、地方紙および地域の公文書などを対象に分析を行った。戦前期に、地域の名誉回復と皇族を結び付ける言説が展開していた当該地域において、特に戦前期との比較を行うことで、戦後における皇族表象の意味を問うた。そして、Ⅱ－ⅲ－ⅳでは、弘前市を中心とした戦後の青森県域における、秩父宮の死とその

後の秩父宮妃の来訪をめぐる諸表象の検討を行った。ここでは、戦中期の秩父宮滞在中の関係者を中心とした顕彰運動が発生しており、そこでは戦前期の記憶の再話が行われていた。

以上第Ⅱ部においては戦後の中央メディアにおける皇族表象と、地域社会における皇族表象について、それらがそれぞれに戦前戦中期からの連続性の中にあつたことを明らかにした。より広く皇室に関する表象に視野を開いたとき、戦後の天皇(制)表象において注目すべきなのは脱軍事化と、天皇の皇族化である。軍事色の脱色は言うまでもないが、戦後の天皇表象はその殆どを戦前の皇族表象を規範的な型として持つものであつた。いわば、戦後における皇族表象の戦前戦中期からの連続性は戦後における天皇(制)の連続性を隠微に示すものであるとともに、戦後の「人間」化した天皇表象を支えるための〈原型〉となつていたのである。そして更にそのような文脈を再び裏切るものとして地域社会における強固な皇族表象の連続はあつた。これらの連続性は戦前戦中期における皇族表象を、延いてはそれらを通して構築されていた戦前戦中期の天皇(制)をメディアの中に生き残らせ、戦後の象徴天皇(制)へのなだらかな移行を成立させていたのである。

以上のように皇族を焦点として、これまで注目されてこなかった地域社会の諸史料を中心に天皇(制)表象の検討を行う本研究は、天皇(制)研究を深化させるものであるとともに、表象文化史研究の方法をさらに押し広げる試みである。